様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０３３３５

研究課題名（和文）異性職の選択/除外過程の解明とキャリア教育コンテンツの開発

研究課題名（英文）Examination on the selection/exclusion process for the opposite gender-dominated occupations and development of career education content

研究代表者
安達　智子（Adachi, Tomoko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：４０３１８７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、異性が多く従事する領域や活動が選ばれにくいという性別分離現象について検討した。結果として、人々は男女の占有率に基づいてジェンダーステレオタイプを反映した職業イメージを形成し、これは幅広い年齢層に共通することが示された。また、自己効力は、決定プロセスを促すことや職業興味の男女差を緩和する効果があることも明らかになった。さらに、若者の将来の生活設計には、伝統的な性役割の社会規範が反映されていたが、理想は男女ともにより平等を志向する傾向が示された。これらの成果を基に作成したキャリア教育のコンテンツは、対象や状況に応じて微修正を加えながら使用することが効果的であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究において、性別職域分離は主に社会構造的な現象として記述されることが多かった。本研究は、男女占有率、職業イメージ、自己効力の概念を用いて、異性が多い職業や活動に参入をためらう心理メカニズムを明らかにした点に学術的意義がある。また、ワークキャリアだけでなくライフキャリアにも着目し、若者の生活設計や時間配分における性役割分業の理想と予測を分析した。これにより、若者の理想とそれを阻む社会規範の影響を見出し、キャリア教育や支援への実践的な提言を行った。

研究成果の概要（英文）：This study examined the phenomenon of gender segregation in the selection of fields and activities dominated by the opposite gender. The results showed that people form occupational images reflecting gender stereotypes based on the proportion of men and women, which is common across a wide range of age groups. It was also found that self-efficacy has the effect of facilitating decision-making processes and mitigating gender differences in occupational interests. Furthermore, traditional gender role norms were reflected in young people's future life planning, but there was a tendency for both men and women to aim for greater equality in their ideals. Career education content developed based on these findings is considered effective when adjusted to suit the target audience and context.

研究分野：キャリア形成におけるジェンダーによる差異の心理学的研究

キーワード：キャリア形成　男女共同参画　自己効力　職業イメージ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国では、将来を担う次世代への働きかけとして、性別による固定化された職域に縛られないキャリア選択への支援が強く求められている。しかし、実際の職業選択を見ると、男性と女性は異なる産業や職種に集中しており、性別職域分離は若者にとって乗り越えがたい障壁となっている。自由応募による職業選択プロセスにおいて、なぜ異性職が除外されるのか、本研究ではそのメカニズムについて職業イメージと自己効力を主軸概念として考える。例えば、情報技術、建設、管理的公務員などの多くは男性が、保育、接客サービス、美容などの領域では女性が多くを占めている。こうした男女占有率の偏りに基づいて、人は「～は男性的だ」、「～は女性的だ」というイメージを持ちやすくなる。そして異性のイメージを持つ職業には、挑戦することやアクセスするのをためらうなど自己効力を形成する機会が得にくくなる。その結果として、将来のキャリア選択肢として選択する可能性が低くなるという心理プロセスが想定された。

くわえて本研究では、仕事や働くことにまつわるワークキャリアに加えて、家事や子育てなどの無償労働、余暇、学習を包含したライフキャリアの視点からも性別分離の問題に取り組む。その背景には、我が国に根強く残る性役割分業観の存在がある。「男は仕事、女は家事と子育て」という性別役割分業意識は、昭和の高度経済成長期に広まった考え方である。このような分業観はどこか古く聞こえるものであり、特に若者層においてはこうした分業観を全面的に支持する者はそう多くはいないかもしれない。しかし、現代社会においても、男性が主たる稼ぎ手となり、女性は有償労働に携わりながらも家事や子育ての主たる担い手であることを期待されるなど、以前よりも見えにくい形で性役割分業が残り続けている。こうしたライフキャリアにおける性別分離について検討する際に、家事・育児などの無償労働と、有償労働の配分という側面から検討を深めることの重要性が強く認識された。

２．研究の目的

ワークキャリアとライフキャリア双方において、異性が占有する領域や活動を選ぶのか、遠ざけるのかという心理メカニズムを明らかにすることを主目的として、本研究では 3 つの下位目標を設定した

(1)職業発達段階における探索段階の後期にある若者は、さまざまなかたちで職業社会を探索し心理的職業決定へとつなげることが期待される。この決定プロセスにおける自己効力と探索の作用はいかなるものかについて検討する。また、同年齢層における立場による違いについても検討をくわえる。

(2)職業の男女占有率にもとづいて男性占有職、女性占有職、そして男女の差異が少ないバランス職を抽出する。そして、男性的である、女性的であるなどの職業イメージには、男女占有率が反映されているかを分析する。また、男女占有率と自己効力の関わりについて調べ、異性が占有しており異性のイメージが強い職業には自己効力が形成されにくくなるとの仮説を検証する。くわえて、職業興味形成のプロセスに自己効力がどのような関わりをもつかを分析する。

(3)社会に出る前段階にある男女が生活時間の設計をする際に、異性が主たる担い手とされる活動は、同性が主たる担い手とされる活動よりも時間配分が短くなるかを検証する。また、予測と理想のギャップ、ギャップの男女差、さらに男性と女性それぞれに対する社会的規範の影響についても分析し、若者男女のライフキャリアにおける棲み分け現象について考察する。

３．研究の方法

(1)正規従業員としての就業経験がない大学生、高卒フリーター、無業者の 3 つの立場の若者からデータを収集した。主要な測定変数は、キャリア選択に対する自己効力、キャリア探索、キャリア決定と猶予である。主要な分析テーマは、キャリア決定プロセスにおける自己効力の作用と、立場によるキャリア探索の様相の違いについて明らかにすることとした。

(2)女性比率が 30%を下回る男性占有職、男性比率が 30%を下回る女性占有職、そして男女比率の差異が 40%未満のバランス職を各 10 職種ずつ、合計 30 職種を抽出した。まず、大学生を対象として、これらの職業に対する男性的イメージと女性的イメージを独立したリ

ッカート尺度を用いて測定した。次に、対象者を拡大して大学生以外も含めた広い層に調査を行い、大学生で得られた結果の一般化可能性を検証した。さらに、異性職に対する自己効力が現実的興味と社会的興味が喚起されるプロセスにどのような関わりをもつかを分析した。

(3) 大学生を対象として将来の生活時間の配分について調査を行った。具体的には、家事、子育て、有償労働、学習、余暇の 5 つの活動に対する時間配分の予測（こうなるであろう）と理想（こうなったら良い）の 2 パターンを測定した。さらに、自分が暮らす社会では、男女の時間配分はそれぞれどうあるべきであると考えられていると思うかという社会的規範を想定した時間配分についても調べた。

４．研究成果

(1) キャリア選択に対する自己効力、他者から学ぶキャリア探索、決定の得点は、大学生と高卒フリーターが無業者よりも高いが、情報収集と自己理解は立場による差が見られなかった。いずれの立場においても、キャリア選択に対する自己効力を持つことが決定に対して直接的なプラスの効果を持つことが示された。さらに、大学生は情報収集を通じて、高卒フリーターは他者から学ぶキャリア探索を通じて決定が促されるという間接効果が認められた。一方、いずれの立場においても、キャリア選択に対する自己効力は猶予の心理状態に対して抑制的に働くことが示された。これらの結果から、自己効力を軸に据えたキャリア支援を行うことの妥当性が得られたといえる。

一方、立場によって効果的なキャリア探索は異なることから、キャリア教育のプログラムやコンテンツを開発する際には、それぞれの立場や状況に応じた柔軟な構成や運用が必要と考えられる。また、キャリア探索においては、自己理解の値が高く、情報収集がそれに続き、他者から学ぶ活動は低い値にとどまっていた。すなわち、自己の内面に向けた探索は盛んに行っているが、自己の外界や仕事社会に向けた探索や他者から学びを得るような活動には消極的であると考えられる。これらの結果を踏まえ、若者が人や社会とつながりながら自己と現実社会の照合が可能になるようなコンテンツが有効になると考えられた。

(2)性別による占有率に基づいて、看護師、幼稚園教諭・保育教諭、美容サービス従事者などの女性占有職、管理職、システムコンサルタント、車掌などの男性占有職、小・中学校教員、事務職、販売店員などのバランス職が抽出された。男性占有職、女性占有職、バランス職のイメージについて分析したところ、男性占有職に対しては男性的イメージ、女性占有職には女性的なイメージが形成されていることが明らかになった。男性的–女性的を一次元上の両極に置いた測定法で得られた過去の結果と同様に、「男性的な－男性的ではない」、「女性的な－女性的ではない」を別の次元として測定した場合でも、ジェンダーステレオタイプを反映させた職業イメージが形成されていることが確認された。なお、男女比率の開きが少ないバランス職の認知は、男らしさについても女らしさについても中点に近いニュートラルなものであることが示された。この点についても一次元上でイメージをとらえた過去研究と一致する結果といえる。サンプルの年齢層を拡大して一般化可能性について検証を行ったところ、大学生で得られた上記の認知傾向と同様の得点傾向が得られ、占有率に基づいた職業のジェンダーイメージの形成は幅広い年齢層に共通すると考えられる。これらの結果は、人々が職業情報を処理する際に、無意識のうちに男女の比率に注目し、それに基づいて職業を「男性的」または「女性的」なものと分類していることを示唆している。そこで、占有率に基づくイメージ形成の心理メカニズムについて、データを用いて解説するパートをコンテンツに含めることにした。

職業興味において、多くの先行研究と同様に、社会的領域は女性の興味が男性よりも高いことが示された。しかし、この男女差は、社会的領域に対する自己効力と女性領域に対する自己効力によって緩和されることが明らかになった。一方、現実的領域では、男性の興味が女性よりも高いことが示された。しかし、この男女差は、現実的領域に対する自己効力と男性的領域に対する自己効力によって緩和されることが明らかになった。これらの結果を踏まえ、コンテンツの作成においては、人々が自身の固定観念を認識し、それがキャリア選択に与える影響を最小限に抑える認知的対処法を導入することが有効であると考えられた。また、社会的に構築された性別の境界にとらわれず、自由にキャリアを模索できるような方向づけも有効であろう。

(3)ライフキャリアの設計について、将来の予測と理想の両側面において有償労働に最も多くの時間が割り当てられており、日本の若者にとって、仕事や働くことが将来の人生設計において中心的な要素であることが示された。一方、予測と理想のいずれにおいても、学習に割り当てられる時間は最小限にとどまっていた。同様の結果は、子どもを持ち働く親の時間配分を調査した過去研究でも示されており、現役世代の生活様式が将来の世代にも反映される「エコー効果」の存在が示唆されよう。一方、家事役割に費やす予測時間は余暇よりも長いが、家事役割に費やす理想の時間は余暇よりも短く、現実的な見通しと希望的な見通しの間にはギャップがみとめられた。

社会規範における時間配分は、男性には女性の 2 倍以上有給労働が割り当てられ、女性は

男性の 2 倍以上家事・育児時間が割り当てていることが示され、若者が今もなお根強いジェンダー規範を強く認識していることが明らかといえる。さらに、補足分析においても、男女がそれぞれどの程度の時間を育児時間に割り当てるかに社会規範が関わりをもつことが示された。これらの結果から、性役割に関する個人の志向や考えを理解するだけでなく、社会において支配的な社会規範を若者がどのように認識しているかを把握することが重要と考えられた。

個人の時間配分の男女差に着目すると、女性は男性よりも家事・育児という家庭内役割に、予測と理想の双方において長い時間を割り当てていた。これは、女性を家庭での無給労働と結びつける伝統的な性役割観が反映されていると考えられる。しかし興味深いことに、性別と予測・理想には交互作用がみられ、差異の方向は性別によって逆転することが明らかになった。すなわち、男性は理想が予測よりも長いことから、家事に費やす時間をより長くしたいと考えているが、実際の見通しはそうではないこと、女性は家事や育児に費やす時間を減らしたいと考えているが、実際はそうではないことが示された。キャリア支援においては、個人がこうした理想と現実の差異を自ら認識し、その差異に何が影響を与えているのかを理解し、差異を縮小させるための方法について検討していくことが重要といえる。

(4)得られた研究成果をもとに、キャリア教育のコンテンツを作成した。主たる内容は以下のとおりである。当初はひとつのパッケージとして活用することを計画していたが、試行の結果、それぞれのフェーズを独立させて編集可能なかたちとしておき、対象や状況にあわせて微修正をくわえて使用できるかたちが望ましいとの結論に至った。

- 男女はなぜ棲み分けをするのか
- 人数と男らしさ、女らしさのイメージ
- 社会の期待と規範
- 自己効力の形成
- 時間配分は誰の意思？
- 社会とつながる

(5)まとめ

本研究では、仕事や職業にまつわるワークキャリアと、仕事を含めた生活全般にわたるライフキャリアについて、異性の領域や活動が選ばれる、遠ざけられる背景にある心理メカニズムを探った。結果として、男女の占有率や現役世代の生き方働き方、そして社会からの期待や規範が、そのプロセスに看過できない影響をもつことが示された。一方、自己効力感や社会規範等の認知に働きかけることで、職業選択や生活設計が平等志向にむかう可能性も示された。得られた結果や先行研究の知見を材料とするコンテンツを作成し試行した結果、個々のフェーズを対象や状況、教育・研修のニーズにあわせて微修正をくわえながら使用していくのが効果的な使用法であると考えられた。その他に、異性が占有する領域の情報や、異性の領域で活躍するロールモデルを提供するなど、性別の壁の影響を最小限に抑えるための情報源を提供することで男女間のキャリア選択や生活設計の格差を縮小することが期待される。今後は、キャリア選択場面において、男性中心社会は女性の自分にふさわしくない、家庭を優先させるのは男性に相応しくない等の伝統的な価値観に挑戦するのを励まし支援するような内容も取り込みながら、さらに内容を充実させていくことを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Adachi, T.	４．巻 38(1)
２．論文標題 Time Allocation Planning among Japanese Youth: Do They Envision the Future as Ideal?	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Waseda Review of Education	６．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Adachi, T	４．巻 －
２．論文標題 Psychological Factors of Gendered Career Choices	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Asia Pacific Career Development Journal	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達 智子	４．巻 40(2)
２．論文標題 若者のキャリア形成とジェンダー―社会正義からの再考―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 キャリア教育研究	６．最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20757/jssce.40.2_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安達 智子	４．巻 23(1)
２．論文標題 キャリア決定―未決定の規定因 ―大学生、フリーター、無業者の比較から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 キャリア・カウンセリング研究	６．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34512/careercounseling.23.1_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Adachi, T
２．発表標題 Is the Think Pilot Think Man Stereotype Still Prevalent? :Gender Ratio and Occupational Gender Stereotypes
３．学会等名 PCDA/IAEVG Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 安達　智子
２．発表標題 性別ダイバーシティ― 分離とバイアスから考える―
３．学会等名 キャリアカウンセリング学会　第27回研究大会シンポジウム『人的資本経営に活かすキャリア・カウンセリング』
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tomoko Adachi
２．発表標題 How does gender affect career choice?: Current situation in Japan and educational intervention for closing the gap
３．学会等名 International Conference on Education, Environment and Agriculture（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 安達　智子
２．発表標題 男女若者のキャリア意識とキャリア設計
３．学会等名 日本キャリア教育学会第39回研究セミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 Adachi, T
２．発表標題 What does "kuki wo yomu" bring to Japanese workforce?
３．学会等名 日本キャリア教育学会第45回研究大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関